

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣 良次

2019. 11
No.315

「すごい工場」第2弾

先回に引き続き「すごい工場」(スチールテック株式会社 出口弘親 著)からの気づきをご紹介させていただきます。

以下引用

自分の“普通は相手にとって普通”とは限らない。

幹部会議では、私は幹部の話にあまり耳を傾けず、自分の思い込みで一方的に話していることが多くありました。

実際、質問があるかどうかを聞いてみても、幹部から意見が出ることは少なく、それも「そういうものだ」と思い込んでいたフシがあったと自覚しています。

しかし、幹部の多くは行動特性が私とは異なり、自分の意見を積極的に話そうとしない傾向が強かった。一方の私は、思いついたことはどんどん口に出し、ぐいぐい引張っていく傾向があります。

このような状態では、活発なコミュニケーションは生まれない、すると結局、会社が自律的に成長することはありません。そのように反省してからは、例えば会議は「幹部が話して社長が耳を傾けるスタイル」に変えました。皆が発言して終わってから、最後に私が総括するようにしました。その結果、会議で様々な意見が出るようになり、現場に基づいた提案が増えてきたように思います。

私自身を振り返ってみると方針フォローや経営会議、安全衛生委員会等々自分の思いを先ず発言してしまうことが多くなってきており今回の文章を読んで反省しています。

イナテックも会議のあり方を改革し、コミュニケーションのとれた自律的に成長できる組織にしていきます。

情熱にまさる能力なし！

致知2019年10月号

以前よりおりに触れて試作開発(西尾東・和泉・WJ)部門のあるべき姿について私の考え方をお伝えしていましたが、同じ内容が致知10月号の記事として取り上げられていました。それは、京都にあるヒルトップ株式会社(旧山本精工)の山本副社長様のお話でした。

イナテックの試作開発部門を“小さな町工場”と考えれば、まったく同じことがいえるわけです。その考え方を学ばせていただき、皆さんにイナテック試作開発のあるべき姿を描いていただきたく紹介します。

危機を乗り越えてきた先に見えてきたもの。

ヒルトップ株式会社 山本副社長

株式会社 浜野SS 浜野社長

● アメリカには僕たちのような試作部門の開発する企業はない。十五、六年前の日本と同じで試作産業というものが無い。

● 現在、医療機器、精密機器、航空機など様々な業態の試作部門を製造している。

● 日本全国の中小、零細工場(製造業)とネットワークを組んで今までになかった製品を創り出したい。(ファブレス化)

● 長年培ってきた加工の技術(加工点)・経験が強みであることは間違いない。

● 思いが強ければ成就するという信念。

● ルーティーンでやっていることは、その仕事を必ず機械で再現できる、工場内を完全にデジタル化して、一度やったことを再現できるようにする。

● 何も変化のない日々を過ごしていると、社員の志、夢、モチベーションは黙っていても小さくなってしまう。

● 時代の変化に応じていろいろと業態を変えてきた。

● 試作部門は何とんでもスピードが最高の武器。「これで勝てるんだ」

● 「我々を取り巻く環境がスピードを増して変化していく状況下において、時代の変化に応じた事業を行う必要がある。」

● 「おもてなしの心」を常に持つてお客様、スタッフ、地域に感謝、還元し、夢(自己実現)と希望と誇りを持った活力ある企業を目指す。

● 一番恐れるのは、社員が委縮したり、現状維持に甘んじたりして挑戦をしなくなるのと。

● 少しマンネリしてきたかなと感じたり、ジョブローテーションを設ける。早い時には三か月でローテーションを行う。

私共イナテックも学ぶところがいっぱいあります。大切なのはこれらを率直に受け止め、一つづつでも実行していくこと、そしてそのスピードを最大限上げることです。

『学ぶ』の語源は『まねる』です。

この素晴らしいヒルトップさんの考え方を

「まねる」ことから始めましょう。

『守破離』です。まずは、『守』

七六

地之穢者多生物、水之清者常無魚。故君子、當存含垢納汚之量、不可持好潔獨行之操。

きたない土には多くの作物ができ、澄みすぎる水には魚は住みつかない。そこで君子たるものは、世俗の恥やよごれを受け入れる度量を持つべきであり、あまり潔癖すぎて世俗の外に超然たる操守を持つべきではない。

